

問一 I

収蔵物の保管と選別、アクセスを管理するアーカイヴの営みは、次代に残すべき過去の記憶のありようを決定すると同時に、支配の機構にとって不都合な記録を隠蔽しつつ、収蔵資料と記憶の真正さを保証する権力として機能することになりうるから。

問二

資料的な価値をもつがゆえに保護し収蔵された個々の文書や作品が、それら自身をもつ固有の価値から離れて、現実世界の権力関係をそのままに反映した選別や価値付与、定義づけをなされてしまうということ。

問三

あらかじめ設定された基準に基づき価値あるものを集める制度的な行為であった蒐集は、アートの工程においては、むしろ敢えてありきたりで陳腐なものが集められ、作家がそれらを直感や反省的思考によって再構成するという創造性の契機となる。

問四

ナチ時代につらなる広汎なドイツ現代史の資料を脈絡もなく配列し、書物の形で展示することで、権力による想起と語りを拒みつつ、理不尽な暴力の犠牲となり声を奪われた人々の記憶を物語る声に耳を傾けようという、祈りが込められている。

問一 II

既に「何物も生産しない」死者となった亡骸を葬う余裕がないという厳しい現実のなかで、川に漂う遺体を物としての「それら」と表現しつつも、それでも放置された人たちを「収容して懇ろに葬るべき」と思われるために、死者を悼む気持ちをこめて「かれら」と表現している。

問二

若者は逃げ遅れて爆撃の犠牲になったりはしないと考えていたが、漂流する遺体の群れに若い学生の亡骸が新たに加わり、安否のわからない同僚学生のこととも想起され、不安が募ったから。

問三

周到に調査して空襲からの避難方法を検討した地図を披露することは、自らの能力の証明となるが、それが実効性のない戯れに過ぎないことも自覚され、自嘲する気持ちがあったから。

問四

空襲がはじまり若者にも犠牲者が出ていただけでなく、死を恐れて結婚を急がされる者が身近にいたり、兵役年齢が引き下げられたりするという、戦時の異様な緊迫が実感され、まだ学生で若い自分たちにとっては遠くにあるものと思われていた死すらも、意識せざるを得ないと考えている。

問一 Ⅲ

- (a) 一晩中眠ることができない。  
全体がまだ真っ白ではなく。

問二

清見潟の磯辺に近いところでの旅寝では、磯に砕ける波の音がわが身に波がかかるのではないかと思えるほど大きく聞え、旅のつらさで流す涙で袖がしきりに濡れてしまうという様子。

問三

沖からの風が今朝は荒く、荒磯の岩のあいだを伝って進む道で衣は潮に濡れ、そのうえ旅の苦難のつらさで流す涙にぐっしより濡れながら進むことよ。

問四

唐代に俗世との交渉を絶って隠棲していた庵から冬の朝に香炉峰に積もる雪を見て漢詩を詠んだ白居易も、蒲原の宿場に立ち寄って富士に積もる雪を見て和歌を詠んだ旅人も、ともに一人でありながら風雅を楽しみ雑念を離れて心清らかである点。

問五

富士の峰の風に漂う白雲を、かつて都良香が「富士の山の記」に書き記した、富士の真っ白な雪の峰で並んで舞ったという二人の白衣の美女の袖だろうかと見ることよ。

IV

問一 さうかにかがじんあるをみる。

問二 宣孟が自分に与えた食べ物を残しておいて、自分の年老いた母に食べさせようと思ったから。

問三 主君の靈公が宣孟を殺すために刺客を部屋の中に隠してあることに気づき、早く逃げ出さないと殺されると判断したから。

問四 （現代語訳） 私は名乗る必要などありません。

（理由） 命の恩人である宣孟を殺そうとしたことを知って、自分の行動を恥じたから。

問五 主君の命令で自分が暗殺しようとした宣孟が、三年前に自分が飢え死にするとるを助けてくれたうえに、母にまで食べ物くれた恩人だとわかり、宣孟に恩返しするために、他の刺客と戦って宣孟の命を救おうと決意したから。